

【特集】

禍難を乗り越えて

文学の可能性——災いとこの闘いの記録を通して——

加美 甲多

はじめに

そのとき、突然、世界は一変した。大きく変わることはない、無意識に思っていた（あるいはそう思い込んでいた）「日常」とはこんなにもろく容易に変わってしまうのかということを誰もが身をもって体感することとなった。そして、現在においても世界中で COVID-19（新型コロナウイルス感染症）との闘いは続いている。この闘いにもいつかは終止符が打たれるはずではあるが、現状では先が見えているとはいえない。この未知のウイルスとの闘いに人類が勝つためには、短期的な見通しと中長期的な見通しとの両方を持ちながら、様々な学問領域の力が必要となってくる。その領域として、医学や科学、疫学、経済学といった分野が真っ先に挙げられてくる。さらには理学や工学、心理学などの分野も挙

がってくるであろう。これらの領域の進歩や適切な理解、判断がなければ、間違いなく人類に勝機は見えてこない。では、人々が未知のウイルスと対峙し、未曾有の出来事が続くなかで、「文学」という学問領域は一体どのようなことができるのであろうか。文学はただ手をこまねいて医学や科学などの発展をひたすら傍観するしかないものであろうか。

いやそうではない。こういった状況に陥ったとき、文学は医学や科学などとはまた異なるアプローチができ、医学や科学でさえもできないことができるのではないか。例えば、シンブルに本を読むことで娯楽として文学を楽しむことができる。また、文学作品は過去の英知の結集であり、そこから「情報」を得ることによって、新たに発見できることや見えてくるものもある。だからこそ、いま改めて文学を見直す必要がある、このウイルスという災い（＝禍難）との闘いにおいても何らかの有効な手掛かりが記

されていると考える。医学や科学は、過去を振り返りながらも未来を切り開いていく学問であるのに対して、文学や史学は、未来を見据えつつも少し立ち止まって過去を見つめ直す学問であるといえる。文学を通して、過去の人々がどのように考えどのような行動したのかについて知ること、出来事や想いを共有・共感すること、心の機微や叫びをメッセージとして受け取ること。未知のウイルスとの闘いが始まったことで、文学がそれ自体の存在意義を問われるような、根幹的な問題に突き当たった、というよりもその問題が改めて顕在化したように思えてならない。まさに文学の価値が問われる瞬間である。

確かに新型コロナウイルス感染症は、現状では人類にとって未知の「存在」ではあるが、ここで絶対に間違っただけではないのは、人類にとって未知の「経験」ではないという事実である。先にも述べたように現代人からすれば未曾有の出来事が続いているので、日本史上、初めてのこのような錯覚に陥り、正体不明という点が一層の恐怖をおおきく感じられるが、そうではない。冷静に日本文学史や日本史と重ね合わせると、何のことはない、このウイルスの正体は、日本人も嫌というほど経験し、苦しんできた「疫病」の一種に他ならない。同時に、これまで日本国内だけではなく、海外からもたらされたウイルスによる疫病にも日本人が悩まされ

てきたことを考えれば、文学に注目する価値は大いにある。つまり、文学の真価を発揮するときがいまやってきたのである。

過去の人々が災いをどのように感じ、乗り越えたのかについて見ることで、また災いを通して過去の人々からのメッセージを共有しながら受け取ることができ、新型コロナウイルス感染症を限りなく既知の経験に近づけることができる。同時に私たちにあって未知のものと闘う場合の心構えや向き合い方についても記されている可能性は高い。そういった過去の闘いの記録をひもどくことによって、文学の可能性について考えてみたい。

一 災いを見つめた『方丈記』

疫病（感染症）との闘いは人類にとって未知の経験ではないと述べたが、この点について永田和弘氏は次のように述べている。¹⁾

振り返ってみれば、人類の歴史は、まさにこのような感染症との闘いの歴史であったことも事実である。殊にも都市文明が発達して、人々が密集して住むようになってからは、ペストや天然痘、インフルエンザをはじめとする感染症が間歇的に猛威を振るい、時には世界人口の一〇〜三〇パーセント

もの犠牲者が出ることもあった。

歴史的事実としては、世界的な感染爆発の歴史はよく知られていることであるが、そのような事態に直面するのは、一人の人間としては、一生に一度あるかないか。多くの人々は実際に記憶としては持っていないのである。歴史の記憶としては共有していても、身につまされた切実なものではなく、そんなこともあったけれど、まさか自分には起こらないだろうというのが大多数の考えるところとなりやすい。(中略)

これは正常性バイアスとか楽観性バイアスとか呼ばれるものである。

やはり、人類と感染症との闘いは昔から世界的に続いてきた歴史があり、それは日本においても例外ではない。例えば、日本中古に都市文明が発達してきた平安京(京都)では、北村優季氏が「九世紀には二〇年に一度程度の割合で疫病が発生している様子がうかがえる」と述べるように、既に平安時代には頻繁に疫病が起こっていたことがわかる。そして、それは日本中世においても続いていた。また、それが現代人にとってはどこか遠い存在で、歴史的には数多の感染症が引き起こされてきたが、自分の一生には関係ないといった「楽観性バイアス」のなかで生きてきた。だ

から、現実の世界において人々が感染症と向き合いきれなくなるといったケースも出てくるのである。では、「歴史の記憶としては共有して」きた感染症を現代の人々が現実のものとして「共有」し、その「記憶」を活かすためにはどうすれば良いのだろうか。

そこでまず考えたいのが、鎌倉時代前期に鴨長明(以下、長明)が記した『方丈記』という作品である。あの有名なすぎる冒頭文「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」で始まる『方丈記』には、実は多くの災いが記されている。長明は一一五五(久寿二)年生まれで一二一六(健保四)年に没したとされる。源平の争い、平家の栄枯盛衰を実際に目撃し、平安時代末から鎌倉時代の幕開けという激動の時代を生きた人物である。長明は賀茂神社の禰宜(神官)の家に生まれるが、後継ぎになれなかったこともあり、仏道へと進み、和歌や琵琶を好んだ風流人とされている。歌論書『無名抄』を残し、また仏教説話集『発心集』を編纂しており、中世においていわばマルチな才能を持った作家のよ

うな位置づけであったといえよう。

その彼は様々な災いを自らで体験したのち、晩年は方丈庵(三メートル四方)で暮らすようになった。自らが体験した災いと隠遁生活とを、それぞれ前半と後半とに描いているのが『方丈記』なのである。この構成に注目するだけでも災いを見つめ、乗り越

えようとした長明だからこそそのメッセージが浮かび上がる。

この点に関して、三木紀人氏は『方丈記』でも、時折都に出かけると記すが、都で情報収集や食料、雑貨の調達をしたのだろう。拠点を郊外に置いて、必要なときに都会に通うというスローライフは、郊外に暮らし、都会に通勤する現代人のライフスタイルにも通じるものがある」と述べている^④。数々の災いの経験↓隠遁生活という流れを現代的に解釈すれば、災いの先に見えてきたものは、恐らく「スローライフ」だったのであろう。もちろん災いと隠遁生活の間には「無常観」という架け橋が存在するが、この点については第三章で詳しく述べたい。いずれにしても、長明は災いからスローライフに行き着いたのである。ここで、どうしても現代の「ステイホーム」ということが想起される。これは単に家にいようというだけではなく、家にいてその「おうち時間」を各自が大事にしようというものである。災いの後、熱心に住居論を論じるようになった長明が自らで実践したスローライフ。これは現代人にとっても重要で見逃せないメッセージとなっている。あるいは感染症という災いによって、家にはいても（いるからこそ）「ファーストライフ」を送らざるを得なくなっている現代人に対する皮肉な警鐘と捉えられるのかもしれない。

多くの災いについて『方丈記』冒頭では「予、ものの心を知れ

りしより、四十あまりの春秋をおくれるあひだに、世の不思議を見る事、ややたびたびになりぬ」と記されている^⑤。物心がついてから『方丈記』を記すまでの約四〇年間に「世の不思議を見る事」がだんだん多くなってきたとある。興味深いのは長明が様々な災いのことを「世の不思議」と評していることである。この現代でさえ、未知のウイルスがあることを考えれば、長明にとってはすべてが「世の不思議」であったと感じることは当然であろう。『方丈記』の成立は一二二二（建暦二）年なので、長明五八歳のときである。

では実際にどのような災いが起こったのかについて、『方丈記』の記述をもとに挙げると、

- 一一六六（仁安元）年「京都大火」（長明一二歳）
- 一一七七（安元三）年「安元の大火」（長明二三歳）
- 一一八〇（治承四）年「治承の大辻風」（同年、福原「遷都」／長明二六歳）
- 一一八一（養和元）年「養和の大飢饉」（長明二七歳）
- 一一八五（元暦二）年「元暦の大地震」（同年、平家滅亡／長明三二歳）

長明は大火災・大つむじ風・大飢饉・大地震といった災いを一〇年足らずの間に軒並み経験していたことがわかる。飢饉には疫病が付きものであり、これが現代における新型コロナウイルス感染症との闘いと類似した災いであったことは間違いない。安田政彦氏は「現代でもインフルエンザやSARS、結核や肺炎などの感染症で命を落とす者は少なくないが、日本の古代においてもつとも猖獗をきわめたのは天然痘（痘瘡）である。天然痘を含めた感染症を疫病とよぶが、（中略）『類聚符宣抄』という史料には、天平七年（七三五）から長元九年（一〇三八）まで、平均三〇年の間隔で痘瘡が大流行したことがみえる」と述べており、日本の古代・中古・中世において天然痘（痘瘡）などの感染症で亡くなる人は多かったのである。当然ながら、当時の人々は何の情報も医療行為もなく、原因や理由はおろか、感染症ということばすら知らずに闘いを強いられたことを考えると、現代人よりもずっとずっと厳しい状況であったであろう。また、例えば「安元の大火」の被害を見ても当時の内裏の一部が焼けるほどであったと『方丈記』には記されている。ひとつだけでも大きな出来事であるのにこれほど多くの災禍を経験した長明は『方丈記』を記さずにはおられなかったと考えられる。『方丈記』の前半はまるで記録のよいうな描写もあり、そういった意味では「記録文学」の先駆ともい

える。実際に東日本大震災（二〇一一年）後にも『方丈記』は注目され、様々に論じられた⁷⁾。

ここで、長明が『方丈記』で記した「養和の飢饉」とそれによって引き起こされた被害の様子を挙げる⁸⁾。

また、養和のころとか、久しくなりて覚えす。二年があひだ、世の中飢渴して、あさましき事侍りき。或は春・夏ひでり、或は秋、大風・洪水など、よからぬ事どもうちつづきて、五穀ことごとくならず。むなしく、春かへし夏植うるいとなみありて、秋刈り、冬収むるぞめきはなし。

これによりて、①国々の民、或は地を棄てて境を出で、或は家を忘れて山に住む。②さまざまの御祈りはじまりて、なべてならぬ法ども行はるれど、更にそのしるしなし。京のならひ、何わざにつけても③みなもとは田舎をこそ頼めるに、たえて上るものなければ、さのみやは操もつくりあへん。念じわびつつ、さまざまの財物、かたはしより捨つるがごとくすれども、更に目見立つる人なし。たまたま換ふるものは、④金を軽くし、粟を重くす。乞食、路のほとりに多く、憂へ悲しむ声耳に満てり。

前年の年、かくの如くからうじて暮れぬ。明る年は立ち直る

べきかと思ふほどに、あまりさへ⑤疫癘うちそひて、まささまに、あとかたなし。

『方丈記』では当時の災いとそれによる混乱ぶりが克明に記されている。「飢渴」(飢饉)に加えて「大風・洪水など」が起り、「よからぬ事ども」が続き、食糧不足も引き起こされた。さらにその翌年には「疫癘」といった流行病(これは恐らく先に触れた天然痘・疱瘡などの感染症)が加わり、まさに事態は最悪であったといえる。そこで何が起こったかという点、五種の傍線部である。

- ①人々は住む土地を捨て他所(他県)に移動し、あるいは山に住んだ。
- ②(僧侶によつて)いろいろな祈祷が始まり、特別の修法が行われた(が効果なし)。
- ③当時の都であった京は地方に生活資源を依存しているのにまったく京に上る者がいなくなつた。
- ④金銭の価値が下がり、食糧の価値が上がつた。
- ⑤感染症が加わつて、ますます被害は深刻化し、世は混乱を極めた。

①では住居の(地方への)移動、②では宗教的な祈りの流行、③では大都市における生活資源の地方依存の顕在化と首都の過疎化、④では金銭の価値の低下と食糧の価値の上昇、⑤では感染症の日本における状況と照らし合わせてみても、同じようなことが現実起こっているからである。直接的な解決方法は描かれていないとはいへ、八〇〇年以上前においても、感染症などの災いによつて同じような状況が引き起こされ、人々が同じように闘つていたことを知るだけでも『方丈記』の存在価値は認められる。この後、『方丈記』では極限状態に陥つた人々が描かれ、仁和寺の隆暁法印なる僧侶が街にあふれる死者を供養しようとする描写へと続く。これらの飢饉や感染症といった災いについて、長明は「まのあたりめづらかなりし事なり」として、(過去には同じようなことがあつたが)直接その惨状に接してめつたにないような体験であつたと評している。その当時の長明と現代の私たちはほぼ同じような感覚を共有しているのである。また、長明はこの直後に地震の災いについて語り、次のようにまとめている。⁽⁹⁾

すなはちは、人皆あぢきなき事を述べて、いささか心の濁

りもうすぐと見えしかど、月日かさなり、年経にし後は、ことばにかけて云ひ出づる人だになし。

災いが起こった当面は人々が皆、物事のむなしさを述べたりしているが、月日が経つ（災いがおさまる）と、（出家遁世する人はおろか）災いとこの祈りについて口にする人さえもいなくなつたという。「だに」が用いられているのは、「出家遁世する人はおろか」というメッセージが隠されており、仏教に対する長明の想いが込められている。その「だに」という強調を抜きにしても、私たちにとって非常に示唆的な一文である。文学作品『方丈記』では、祈りや供養の重要性とともに、こういつた経験を忘れないこと、そしてそれを実際に経験した者の責任として後世に伝えていくことの重要性について説かれているように思えてならない。やはり、『方丈記』は災いとこの闘いの記録なのである。

二 災いとこの向き合い方

前章においては、災いをどこまでも見つめた長明の『方丈記』について考察した。その上で、本章では古典世界、特に中世において災いをどのように捉え、災いとこのように向きあつたのかに

ついて見てきたい。

感染症などの災いに関する記述は鎌倉時代の説話集にも数多く認められ、ここからも当時の人々と感染症との距離感が改めて見えてくる。次に橘成季が編纂した説話集である『古今著聞集』巻第二の三八話「嵯峨天皇宸筆の心経と弘法大師の御記の事」を挙げる。¹⁰

嵯峨天皇の御時、A天下に大疫のあひだ、死人道路に満ちたりけり。これによりて天皇みづから金字の心経を書かせ給ひて、弘法大師に供養せさせたまつられけり。Bその効験私の詞をもてのおべからず。奥に大師、記を書かせ給へり。その御記に云はく、

a 時に弘仁九年の春、天下大疫す。爰に帝皇自ら黄金を筆端に染め、紺紙を爪掌に擡げ、般若心経一巻を写し奉る。予、講經の撰に範として、経旨の宗を綴るに、b いまだ結願の詞を待たずして、蘇生の族その途に溢れ、夜変じて日光赫々たり。これ愚身が戒徳に非ずして、金輪の御信力の爲す所なり。但し仏舎に詣づる輩、この秘鍵を誦し奉れ。昔、予、鷲峰の説法の庭に陪りて、親しくこの深文を聞く。豈その儀に達せざらんや。

その時の御経、かの御記、嵯峨の大覚寺にまだありとなん。

『古今著聞集』という説話集は一二五四（建長六）年に成立している。全体で七二〇余りの説話が載り、大規模な説話集である。

内容も広範囲で多岐にわたり、平安時代から鎌倉時代の衣食住を知ることができる資料といえる。また、前時代の平安貴族への関心とともに中世庶民も実録的に描かれている。ここに挙げた説話は、全国に「大役」（疫病・感染症・伝染病）がはやったときのもので、現代と同じような状況が想定される。ただし、傍線部Aにあるように、その被害は死人が道路に満ちる程であったというのだから、その壮絶さは現代人以上に苛酷であった。そこで、天皇自らが疫病の終わりを祈って般若心経をお書きになって（これを「宸筆」という）、般若心経の所説の概要を弘法大師（空海）に書かせて供養させたが、その際の弘法大師のおことばも残っている。傍線部Bにあるように、その効験（効果）は勝手なことばやいい加減なことばで書くわけにはいかないので、弘法大師のおことばをそのまま引用する。というような説話構成になっている。実際に弘法大師のことばが引用されている。従って、Aとa、Bとbはそれぞれ『古今著聞集』編者と弘法大師が同じことを述べ

ていて対応関係にある箇所である。弘法大師のことばに注目すると、aにあるように、これは弘仁九年、つまり八一八年の出来事であるといい、bにあるように、まだ弘法大師が概要を書き終わる前に疫病から回復した人々が街にあふれる程の効果であったというのである。

波線部にもあるように、弘法大師はこの出来事を自分の力ではなく、深い仏教信仰の力であるというようにまとめている。多分に仏教讚美や天皇讚美の演出が施された説話であり、現代人の科学的な目から見れば、天皇が祈りの心を持って経を書いただけで感染症から回復した人々が街にあふれたというのは滑稽でさえあるかもしれない。

しかし、平安時代や鎌倉時代の人々にとって、これは事実であった、というよりも事実として「信じたい」出来事であった。まともな医療行為がなかった中古・中世の日本において、庶民が感染症と闘える手段のひとつは「祈る力」と「信じる力」であった。例えば、現代においても、もし十分な医療行為が行えない状況に陥れば人々はどうするであろうか。やはり同じように何かにすがり、祈り、信じるであろう。ここでさらに注目すべきは説話末尾の一文である。その天皇直筆の般若心経や弘法大師の御記は、嵯峨の大覚寺にいまもあるというのである。これは何を意味して

いるのかといえ、ひとつは事実であることを強調するための定型句である。一方で、そういった場所がある、存在しているというところが当時に人々にとつては重要だったのである。感染症に感染したとき、あるいは感染症を予防するために、祈り、信じる場所があることだけでも人々は救われたのである。無形の病に勝つためには有形のシンボルが必要であった。現代風にいえば、実際に見にいけるパワースポットということになるか。兎にも角にも気持ちや前向きにさせるもの、その有無によって生きる力は大きく変わったのである。これは現代においても同様である。「祈り」や「信じる力」は、ときには医学や科学などをも凌駕する可能性を有していたことをこの説話は伝えていいる。

次に無住という僧侶が鎌倉時代後期に編纂した説話集である『沙石集』に載る説話、巻第七の九「身を売って母を養ひたる事」を見ていきたい。^①

去文永年中に、炎干、日久くして、国に飢饉夥しく聞こえし中にも、美濃・尾張、殊に餓死せしかば、多く他国へぞ落ち行きける。

美濃国に貧しき母子有りけり。本より便りなき上、かかる世にあひて、飢死にすべかりければ、①忽ちに心憂き事を

見んも、口惜しくて、「身を売って、母を助けん」と思ひて、母にこの様を云ひければ、ただ一人持ちたる子なりける上、孝養の志も有りければ、離れん事悲しく覚えて、「死ぬとも同じ所にて、手をもとらへ、頭をも並べてこそ死なぬ。いく程あるまじき世に、生きながら離れんも、口惜しき事なり」とて、母、ふつと許さざりけれども、②若し命あらば、自ら廻り逢ふ事も有りなん。忽ちに飢死なん事も、さすがに悲しく覚えて、母は制しけれども、身を売って、代わりを母に与えて、泣く泣く別れて、東の方へ下りける。

三河国、矢作の宿に、相知りたる者の語りしは、「商人の、人をあまた具して下りける中に、若き男の、人目もつつまず、声を立てて泣くありけり。人あやしみて、『何ゆゑに、さも泣くぞ』と、云ひければ、『美濃国の者にて侍るが、母を助けんが爲に、身を売って、東の方へ、いづくに留まるべしともなく、下り侍るなり。母の、余りに別れを悲しみ、悶え焦がれ候ひつるが、日を数へてこそ思ひ起こすらぬ。命あらば廻り逢ふ事もありなん』とこしらへ置きつれども、また二度、母の姿を見ずして、東の輿、いかなる山の末、町の末にか、さすらひ行きて、夕の煙と上り、朝の露と消えて、また母を見ずしてや止みなん』と口説きたてて、事の子細を委しく語

りて、声も惜しまず泣きければ、見聞く旅人も、宿の者も、袖をうるほしけり」と語りし。

至孝の志まめやかに、昔に恥ぢず有り難く覚えて、返々哀れにこそ侍りしか。

『沙石集』は一二八三（弘安六）年に成立した、いわゆる仏教説話集（仏道へ導くという目的を持った説話集）である。仏教説話集でありながら、たとえ話として笑話や和歌を積極的に取り入れていることが大きな特徴で、後世にも多くの伝本や関連本が創出されていることから、鎌倉時代以降も大きな影響力を有した作品であったといえる。その『沙石集』でも日本中に飢饉が起り、特に美濃国（岐阜県）や尾張国（愛知県）では多くの餓死者が出て、他国に逃げる人が続発したときのことを記している。餓死者となつてはいるが、この死者のなかには感染症による被害も含まれていた可能性は極めて高い。

この説話は、美濃国にいた母子を描いている。もともと貧しかったが、飢饉が起ったことでいよいよどうしようもなくなつたとき、孝行息子は自らの身を売って、母を養うことを決意する。その後、编者（著者）である無住の知り合いがこの息子に出合い、「母が日数を数えて自分を思い起こしているだろう。生きていれ

ばまた母と逢えると思う一方、（実際には）東国かどこかの奥地で母を見ることもなく一生を終えるのだろう」と泣く泣く語るのを見聞きして、周囲の旅人も宿の者も皆、涙で袖を濡らしたというものである。無住は、この息子の孝行心をたたえ、現代（鎌倉時代後期）ではめつたに見られなくなったことと思われ、哀れであると評して締めくくっている。

注目すべきは、傍線部である。このままでは飢えや疫病による死を待つしかないことが自明となつたとき、傍線部①にある通り、息子は悲しく恨めしい結末を親子で迎える（②このまま死の道を選択する）のは、無念で残念すぎるとして、唯一、生き残れる手段である身売りを決意する。それに対して、孝行心もあるひとり息子と別れるのがつらい母は猛反対し、生き別れるよりもこのまま同じところで死を待とうと提案する。しかし、息子は、傍線部②にある通り、もし生きてさえいれば、巡り逢えることもあるかもしれない、このまま何もせずにすぐに死を迎えるのは悲しいとして、制止する母をふりきって、東国に向かうのである。孝行息子が親の制止をここまでふりきって、また自分の身を売ってまで「生」という選択肢を選ぶのである。離れ離れにならずに親子で「死」を待つことの方が幸せのようにも感じるが、災いによつたとえどのような状況に陥っても「生」の可能性があるのならば、

その「生」を捨てることはしない。現代にもまして、もつと厳しい環境にありながらもここまで「生」にこだわっている。まさに人として「生きる力」「生き抜く力」なのである。ここに強いメッセージ性を感じざるを得ない。付言すれば、傍線部②や波線部にあるように、息子は、命さえあれば、また母と逢えるかもしれないということばを繰り返している。これもやはり「信じる力」が大きく作用している。息子自らが述べているように、たとえそれがほぼ実現しない、極めてはかない希望であったとしても母との再会を夢見て信じているのである。

当然ながら身売りはいつの時代においても肯定されるべき行為ではない。しかし一方で、どんな状況に陥っても「死」という方向には向かわず、どんなに苦しくつらい現実が待っていたとしても「生」という方向に進もうとする強い気持ちを息子は持っていた。それは生き抜く力や信じる力に支えられていたのである。ここにも災いとの開いの記録が確かに残っている。

また、『沙石集』巻第一〇本の「浄土房遁世の事」では、「疫病（感染症）が起こったときのことを次のように記している。¹²⁾

人の病重くして、正念も乱れ、臨終にのぞむには、日来能く能くし慣れ、思ひ慣れ、心に染みたる事、必ず現はる。近

年、疫病に、人多く病に死する事を聞きしに、平生の慣れたる事を、口にも云ひ、身にも振舞ふと云へり。されば、能く能く思ひ入れて、三業相應して、念仏の宿善を勤めなん。功入りて往生の大事を遂ぐべし。

人は病が重くなつて臨終になったとき、日頃の習慣や心に染みついていることが必ず表れる。近年、疫病で多くの人が病死したと聞いたが、やはり普段から慣れたことを口に出し、行動にも表したそうだ。だから、普段からよくよく考えて、しっかりと仏道修行に励むべきだというものである。興味深いのは、人は臨終や災害といった極限状態のときにこそ、普段から思い、考えていることがそのまま言動として出てしまうということである。そして実際に当時、感染症が引き起こされたときも同様であったようである。このことばも現代人にとって示唆に富んでいる。災いによつて極限状態や緊急時になったときに、人は普段どのように生きてきたのか、が問われるのである。

三 無常観

ここまで、日本中世の文学作品を通して、災いの見つめ方、向

き合い方について考えた。『方丈記』では祈りや供養、災いを忘れずに伝えていくこと、『古今著聞集』では祈る力や信じる力、『沙石集』では生き抜く力や普段からの言動の重要性について説かれ、これらが災いと闘い方でもあった。では、時代のなかで人々はどのように災いに対抗していたのだろうか。

日本中世という時代を端的に表すことばのひとつに「無常観」というものがある。これは「無」と「常」との間に「レ点」を付けると、「常なるもの無し（常なるものはない）」で、「観」は観ずること、つまり考えることを指す。『日本国語大辞典』でも「無常」は「一切万物が消滅変転して、常住でないこと。現世におけるすべてのものがすみやかに移り変わって、しばしも同じ状態にとどまらないこと。特に、生命のはかないこと。いつ死ぬかわからないこと。また、そのさま」と説明されている¹³⁾。本来「無常観」は仏教用語で、実際にはもっと難しい解釈が必要なのかもしれないが、極めて単純に言えば、「世の中のすべてにおいて、常に変わらないものはないということについて考えること」である。第一章で少し触れた『方丈記』の冒頭を改めて挙げると、

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しく

とどまりたる例なし。世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。

とある¹⁴⁾。流れている河の水の流れは絶えることはないが、決して同じ水ではないように、この世で同じ状態であり続けるものはないという印象深い語りかけから『方丈記』は始まっている。また、鎌倉時代の軍記物語『平家物語』の冒頭においても、

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。奢れる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前塵に同じ。

とある¹⁵⁾。やはり、『平家物語』でもすべてのものは変わっていき、栄えている者もいつかは滅びるといふ語りかけによってその物語が幕明けている。このように、日本中世において無常観によって支えられている文学作品は枚挙にいとまがない。様々な作品においてまるで共通認識であるかのように説かれている、この無常観は中世という時代を表すキーワードのひとつであったことに間違いはない。何となく現代的な感覚でも理解できることばではある

が、無常観が中世の文学作品に多く登場し、ある程度は日本の中世の人々の間でも共有していた感覚であろうことの意味合いの深さは見逃してはならない。

当時の人々は祈りやどこまでも信じること、どこまでも生に執着しようとすることで疫病などの災いに対抗する一方で、逆に達観し、変化を受け入れようとする気持ちをいつも心のどこかに持っていたのである。ここで『日本国語大辞典』の「無常」に生命のはかないことやいつ死ぬかわからないことといった意味も含まれていることが想起される。これが真の災いとの闘い方なのであった。つまり、何かにすぎり、精一杯、生きようとすることは重要であるが、それにも限界はあった。そこで、同時に世の中にはいつ一変してもおかしくない、むしろ変わらないものはないという覚悟、心構えを普段から持つておくことで、現実を受け入れていたのである。それが「無常観」ということばに収斂される。『方丈記』で見た「養和の飢饉」も、『古今著聞集』で見た弘仁九年の「大疫」も、『沙石集』で見た親子の別れも、飢饉や疫病によって突然もたらされたものである。それぞれの場面においても世界が一変したことは間違いない。その変化に対して「信」や「生」への執着によって抗いつつ、その変化を良い意味であきらめ、柔軟に受け入れ、対応することこそが災いと闘うための最善の方法

だったのである。

現代においても突然、何の前触れもなしに世界中で未知のウイルスとの闘いが始まった。そして、世界は一変した。いや、誰もが一変せざるを得ない状況に追い込まれた。いずれは対処する方法が見つかり、また状況は変化する。しかし、では完全にもとの世界に戻るのかといえば、そういつたわけではない。むしろこれからは変化した世界に適応していくことが重要になってくるであろう。これがまさに「無常観」という感覚なのではないだろうか。常に変わらないものはない。たとえ変わっていないように見えるものでもすべて変化している。そういつた感覚を受け入れなければ、生きてはいけない。それが中世という時代であり、実際にこの感覚を受け入れることで心の不安や拘泥を取り除いていた。これは中世人だけではなく、現代に生きる人々も「無常観」という感覚を心のどこかに持つことで気持ちを落ち着けることができるのではないか。普段はそれが見えていないだけであり、世の中に変わらないものはない。同時にもとの世界に戻すという感覚ではなく、世界が変わったことを柔軟に受け入れることこそが目指すべきところである、という中世からのメッセージととることができるのである。

現代の「日常」では、卒業や大切な人との別れといったことに

出会わない限り、「無常観」を観ずる瞬間は極めて少ない。それが今回のウィルスとの闘いによる「非日常」という明確な生活の変化によって、改めて「無常観」を観ずる瞬間が訪れ、時代を越えて共鳴しているのである。まったく動きがないように見える事柄でも実際にはすべて変化しているのであり、時代や場所が変わってもこの本質は変わることがない。皮肉なことに無常観といながらも、無常という感覚自体は不変的なものなのである。

おわりに

先に挙げた永田氏はこういった災いが起こったときの情報について、次のように述べている。⁽¹⁶⁾

このような大きな出来事に見舞われると、社会には、さまざまな情報が溢れる。特に昨今の情報化社会においては、さまざまな媒体を通じて、重要なものからほとんどデマに近いものまでが、いつせいに各個人に殺到する。噴飯ものの情報ももたらされたりもするが、ある場合には、デマがその被害をいっそう深刻なものにした歴史的な例にも事欠かない。そこから如何に大切な情報を得るか、あるいは不要な偽情報に

振り回されないか、その情報の取捨選択が、身を守るうえで、もっとも大切な手段となるのである。

永田氏はこの後、必要最低限の科学的情報を得て個人が判断することと、短歌という記録に目を向けることの重要性を説いている。文学の旨みを凝縮した短歌はもちろんのこと、文学全体に目を向けることで得る「情報」の意義深さは揺らぐことはない。永田氏が述べるように必要最低限の科学的情報は必要であるが、この情報化社会において正しい情報を得ることは困難になりつつあることも事実である。そういった情報を精査する能力を培わなければならぬ状況であるからこそ、文学から得られる情報の価値は、今後より高まってくるであろう。本論では災いとその闘いについて文学を通して見てきたが、実際に日本中世においても現代以上に頻繁に災いは起きており、⁽¹⁷⁾ 災いは日常茶飯事であった。常に災いと闘いを記録してきた文学という学問に目を向け、顧みることが現代の不確かな情報に頼るよりも、よほど確かで必要な行為である。そこでは祈ること、忘れないこと、信じること、生き抜くこと、非日常に備えて日常を大切にすること、世の中に変わらぬものはないという感覚を受け入れること、といった経験に基づいた人間の究極的な生き方が描かれており、文学が可能性

に満ちた存在であることを証明している。

注

- (1) 永田和弘「はじめに」(永田和弘・釈徹宗、別冊NHKこころの時代 宗教・人生『コロナの時代をよむ』、NHK出版、二〇二〇年)を用いた。
- (2) 北村優季「疫病の流行 疫病と御霊会」(『平安京の災害史 都市の危機と再生』、吉川弘文館、二〇二二年)を用いた。
- (3) 三木紀人校注、新潮古典日本集成『方丈記 発心集』(新潮社、一九七六年)を用いた。
- (4) 三木紀人、図説「無常」の世を生き抜く古典の知恵『方丈記と徒然草』(青春出版社、二〇二一年)を用いた。
- (5) 注(3)に同じ。
- (6) 安田政彦「疫病の蔓延」(『災害復興の日本史』、吉川弘文館、二〇二二年)を用いた。
- (7) 例えば、玄侑宗久『無常という力―「方丈記」に学ぶ心の在り方』(新潮社、二〇二一年)がある。
- (8) 注(3)に同じ。なお、傍線部や数字は私に付した。
- (9) 注(3)に同じ。
- (10) 西尾光一・小林保治校注、新潮日本古典集成『古今著聞集(上)』(新潮社、一九八三年)を用いた。なお、傍線部やアルファベット、波線部は私に付した。
- (11) 小島孝之校注・訳、新編日本古典文学全集『沙石集』(小学館、二〇〇一年)を用いた。なお、米沢本の本文は漢字片仮名交じりであるが、新編日本古典文学全集では本文が漢字平仮名交じりに改められている。本論においても読みやすさを考慮し、そのまま用いた。また、傍線部や数字、波線部は私に付した。
- (12) 注(11)に同じ。
- (13) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第二版 第二巻(小学館、二〇〇一年)を用いた。
- (14) 注(3)に同じ。
- (15) 梶原正昭・山下宏明校注、新日本古典文学大系『平家物語(上)』(岩波書店、一九九一年)を用いた。なお、新大系は東京大学国語研究室蔵本の本文である。
- (16) 注(1)に同じ。
- (17) 水野章二『災害と生きる中世 早魃・洪水・大風・害虫』(吉川弘文館、二〇二一年)などを参照した。